"幻のピアニスト"

アルヴィン・ニレジハージ作品世界初演

―高崎短期大学音楽科開学一周年記念―

Errin Nyiregyhazi

1982

● 主催／**日本ニレジハージ協会**

● 共催／**高崎短期大学音楽科**

Promoter **The Errin Nyiregyhazi Institute in Japan**
Takasaki College of Music

● 後援／**外務省・読売新聞社**
国際交流基金・NHK（前橋放送局）

Supporter **Ministry of Foreign Affairs**
The Yomiuri Shinbun
Japan Foundation NHK

Elvin Nyiregyhazi, June 2, 1980

アルヴィン・ニレジハージ作品世界初演

First Historical Performance in the World by Ervin Nyiregyhazi—Mis Works—

——高崎短期大学音楽科開学一周年記念——

The first Anniversary of Takasaki College of Music

●群馬音楽センター（高崎）

Gunma Musical Center—Takasaki City—

アルヴィン・ニレジハージピアノリサイタル

Piano Recital by Ervin Nyiregyhazi

●第一生命ホール（東京・日比谷）

Daiichi Seimei Hall—Tokyo—

御　挨　拶

堀越　久良

新春のお慶びを申し上げます。

本日は、ピアノ音楽の巨匠アルヴィン・ニレジハージ氏のコンサートに多数御参加下さいまして心より御礼申し上げます。

このたびの催しには北海道から九州まで日本全国から音楽を愛する方々の御参加をいただき私といたしましてもその御厚意に精一杯お応え致して参りたいと存じます。

半世紀に亘って世に出ることのなかった〝幻の作品〟が、高崎短期大学の開学一周年を記念して、世界に初演されることの意義は重大なものがあると申せましょう。

コンサート成功のために物心両面御援助下さいました外務省、読売新聞社、国際交流基金、等々諸団体並びに賛同者の諸先生方には衷心より御礼申し上げます。

又、ニューヨーク・タイムズの著名な音楽評論家、ハロルド・ションバーグ氏も、このコンサートのために遠路ニューヨークから駆けつけられました。

特に、1月10日の氏の作品世界初演コンサートの盛り上りの中で、1月21日読売新聞社が主催する東京公演が確定し、ニレジハージ音楽をより多くの方々に聴いていただくことができるようになりました。

コンサートの準備等不慣れな仕事をやっているために皆様に御不自由をおかけすることがあるかもしれませんが、スタッフ一同細心の注意でのぞみ、この記念コンサートと行事を成功させる決意です。

どうか暖かくお見守り下さい。

（高崎短期大学学長　日本ニレジハージ協会会長）

「リストの後裔」ニレジハージ

薬科 雅美

昨今の来日演奏家ブームの中で、おそらくはもっとも貴重な体験といえる音楽会が、一昨年（1980）の5月31日と6月1日に、東京ではなく、群馬県高崎市の高崎音楽大学で開催された。〝幻の天才ピアニスト〟〝リストの化身〟〝神聖なる狂気〟などといい伝えられた話題のアルヴィン・ニレジハージのリサイタルであった。往年の国際的な名声をよそに、何十年間にもわたって隠遁と放浪の生活をつづけ、人前で演奏することを拒否しつづけて来た彼が、信じがたいことながら、はるばる日本に訪れて、その秘芸を披露したのである。

ニレジハージがとり上げる曲は、一般になじみの薄いものが多かった。しかもニレジハージは、原典尊重の気風が強い現代においてはきわめて特異なことであるが、しばしば楽曲を自由に手直しして、むしろ彼の編曲と記述すべきような演奏を行なう。テンポは一体におそめで、あれこれの点で楽譜の指示と極端にちがう場合もあるから、知っている曲でもそれと判じがたいケースが起こるのである。

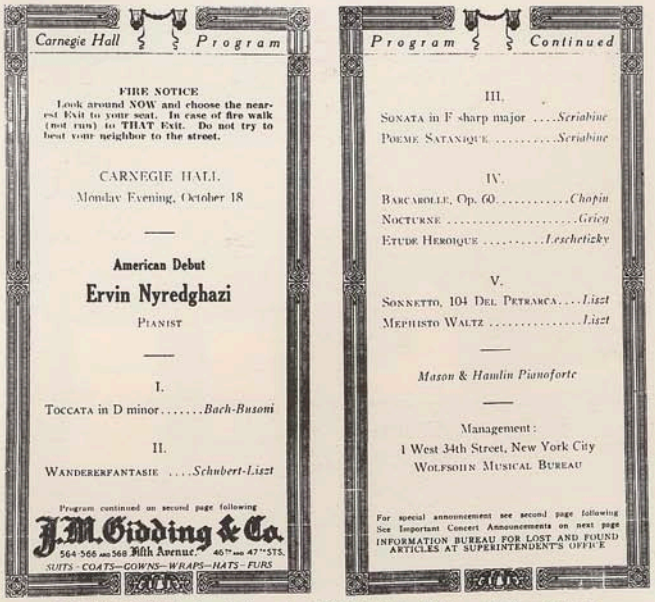
しかし高崎音大のニレジハージのリサイタルは、さまざまな悪条件にもかかわらず、まことに銘記すべきものであった。長年にわたってピアノからまったく離れた生活をおくり、鍵盤に指をふれる機会がなかったというこの老大家（1903年、ブダペスト生）は、本当にそうだったのかと疑いたくなるほどの、巨匠的なスケールと音の輝きをもってピアノを弾奏した。低音の強打はうなりを発するばかりに強大で、ピアニッシモは軽く柔らかかった。よくぞニレジハージは、長い空白の期間に、自分のテクニックをさびつかせず、今日まで保ったものとの讃歎を禁じ得ないのである。

そのことにもまして、真に驚異であったのは、グランドマナーというべき彼の演奏スタイルであった。それは、ラフマニノフ、パデレフスキー、ブゾーニ、フリードマンその他の往年のロマン派的な巨匠時代の大家たちを思い浮かばせるものであり、彼らの再来とも私には感じられたのである。言葉を変えていうと、タイムトンネルをくぐり抜けて、いきなり50年前、100年前の世界につれもどされたような錯覚をいだかせたニレジハージの演奏であった。それはまさに奇跡というべきことなのである。

ニレジハージが楽譜に忠実ならざる演奏を行なうことも、それを彼の勝手気ままな振る舞いと考えてはならないだろう。モーツァルトの作品は、楽譜に書きしるされている音符に自由な装飾を付け加えていくことがむしろ正しい演奏法とされているが、同じようにリストのピアノ曲も、それをリスト自身が楽譜どおりに演奏したとは、とうてい考えられないことである。

ニレジハージは、彼がこれまでに創造してきた1,500曲を超える門外不出の作品中のいくつかを、初めてこの日本で公表する。〝リストの化身〟とも讃えられるニレジハージは、このようにピアニストであると同時に作曲家でもあるのだ。彼は創造的な芸術家の立場からリストの作品を研究し、リストの意図した表現法の真髄を探りあてる。それが一見、自由奔放にみえるニレジハージのリスト演奏の実体なのである。〝リストの化身〟として過去の世界を現（うつつ）のものとして見せてくれるニレジハージは、もっと根源的な意味において時代性を超越したピアニスト、つまり、つねに原点を忘れない真の芸術家であるのだろう。

（音楽評論家）



Carnegie Hall Program

FIRE NOTICE
Look around NOW and choose the nearest Exit to your seat. In case of fire walk (not run) to THAT Exit. Do not try to beat your neighbor to the street.

CARNEGIE HALL
Monday Evening, October 18

American Debut
Ervin Nyredghazi
PIANIST

I.
TOCCATA in D minor.....*Bach-Busoni*

II.
WANDERERFANTASIE ....*Schubert-Liszt*

Program continued on second page following

J.M. Gidding & Co.
564-566 and 568 Fifth Avenue 46TH and 47TH STS.
SUITS - COATS - GOWNS - WRAPS - HATS - FURS

Program Continued

III.
SONATA in F sharp major ....*Scriabine*
POEME SATANIQUE .....*Scriabine*

IV.
BARCAROLLE, Op. 60.....*Chopin*
NOCTURNE .....*Grieg*
ETUDE HEROIQUE .....*Leschetizky*

V.
SONNETTO, 104 DEL PETRARCA....*Liszt*
MEPHISTO WALTZ .....*Liszt*

Mason & Hamlin Pianoforte

Management:
1 West 34th Street, New York City
WOLFSOHN MUSICAL BUREAU

For special announcement see second page following
See Important Concert Announcements on next page
INFORMATION BUREAU FOR LOST AND FOUND ARTICLES AT SUPERINTENDENT'S OFFICE

●1920年10月18日、カーネギー・ホールにてアメリカ・デビューのプログラム●

孤高の天才ニレジハージ

ハロルド・ショーンバーグ

アルヴィン・ニレジハージの例は、ピアノの世界でも最も奇異なものだと言ってよい。1978年、彼は世界楽壇の話題にのぼり、その時、音楽好きな大衆の多くが、彼の人生の不思議な事実を知った。

神童といわれた幼年時代の驚くべき力量、青年になってからのセンセーショナルな活躍。1930年代の失標、貧困、無秩序な生活、酒に溺れた日々、たび重なる結婚の失敗。人生のあらゆる場面をよみがえらせたり、終始メロディーを頭と指先で暗譜していられる能力、作曲への沸き上がる欲求。1973年サンフランシスコの教会で開いたリサイタルでの出現。人々はこのような事実を知った。

彼は約50年もの間ピアノに触れていなかった。にもかかわらず、リストを弾いたそのコンサートのライブレコードは、多くの愛好家の間にすさまじい興奮を巻き起こした。「ニレジハージは生きている。しかも伝説的な人物が実際にピアノを弾いている。」

主要都市ホールでのコンサートやオーケストラとの協演の話もあった。フォード財団の援助でレコーディングさえ行われたにもかかわらず、彼の意志によって始んど何事も成就せずに終った。1903年にハンガリーに生まれたこのピアニストは、再びスラム街へと姿を消してしまった。一体なぜだろう。ごみごみしたスラムに郷愁でもあるのだろうか。それは誰にも分らない。そしてニレジハージ自身も、堅く口を閉ざして多くを語ろうとしない。

そのようなわけで、今まで、彼のコンサートが実現する可能性は全くありえなかった。

その彼がついに一昨年日本で弾いた。さらに今度は、生前には不可能だと思われていた彼自身の作品の発表まで実現したことは奇跡といってもよい。

演奏は神聖な狂気で、このピアニストの類無き力量を強く印象づけている。このような鍵盤へのアプローチをしたピアニストは、恐らく19世紀のアントン・ルービンシュタインを除いてはいないだろう。ルービンシュタインも轟きわたるほど強く鍵盤をたたき、爆発するような熱情を表現したそうである。

ニレジハージの音楽の全てが魅力的に思えるが、現代的な演奏を聞き馴れた人にはややうっとうしい演奏に聞こえるかもしれない。ニレジハージは、ピアノのソノリティについて独特な考え方を持った人で、彼のような考え方をするピアニストは現代では彼一人しかいない。私に言わせればそこが彼の魅力なのだ。

彼はロマン主義者であり、数多くのロマン主義的な演奏家と同じく音符を忠実に再現することよりも自己の熱い信念に動かされて演奏する場合の方が多い。だから現在のように、客観的で楽譜に忠実な演奏が主流を占める時代では、ニレジハージの演奏がうっとうしい感じを与えることがあるかもしれない。しかし19世紀のロマン主義的ピアニスト達は、少しもためらうことなくテキストに改訂を施したのである。

たとえば、アントン・ルービンシュタインは高弟ヨーゼフ・ホフマンにこう云ったという。「最初に弾く時は、書かれてある通りに弾きなさい。そして、譜面どおりに弾くことができたとして、もう少し何かつけ足したり、変更を加えたいと思ったら、その時はそうして悪い理由など何もない」と。

このようなロマン主義的態度を持ったピアニストの代表者といえばバロック音楽をその時代のピアノ技法で解釈していったルービンシュタインや、フルッチォ・ブゾーニがいる。メンデルスゾーンがバッハのマタイ受難曲をオーケストラ・アレンジした時、あるいはリストがオルガン曲「プレリュードとフーガ」をピアノ用に編曲した時、又、マーラーがシューマンの交響曲に手を加えた時、自分はロベルト・シューマンの手助けをしているのだ、と思った筈だが、それと同じようにロマン主義的音楽家は、原曲に手を加えることが作曲家のためになる、と心から信じている。

今日では、最早こうした行為は行われないが、こうした行為こそロマン主義的思考様式の要を成すものであり、ニレジハージというピアニストはロマン主義の本流を受け継いでいる。

彼の演奏の真意を理解するためには、余程注意深く聴かなくてはいけない。現存するどんなピアニストの場合にも通用しない理屈というものが、彼の場合には有効なのだ。

スローなテンポが、かえって演奏を確固たるものに形成していく。ニレジハージのトレード・マークとも言うべき圧倒的な盛り上げ方を真似できるピアニストは何処にもいない。ニレジハージとルービンシュタインのもう一つの共通点は、作品の概念的な把握を重視することで、ある曲を解釈することに熱中した時のルービンシュタインは、ミスタッチの事など気にかけなかったと言う。ニレジハージも同じである。

ニレジハージのつくるサウンドは、その雄大なスケールと荘厳な美しさに於いて、ルービンシュタインのそれにきわめて近い。このようなトーナル・プロダクション（Tonal Production）をめざすピアニストは、稀にしかいない。あるいは、ブゾーニはこうしたサウンドの持ち主だったかもしれない。イグナツ・フリードマンは、明らかにこのタイプであった。イグナツ・パデレフスキーもこうしたサウンドを創るピアニストで、ニレジハージのスタイルは、パデレフスキーとブゾーニのふたりから大きな影響を受けている。この偉大なトーナルの伝統を継承しているのは、現在、彼の他にウラジミール・ホロヴィッツただひとりである。

ニレジハージがどんな曲を弾いても、聴く人にとってそれはオリジナルな体験となろう。そして、ニレジハージのピアノは、失なわれつつある偉大な時代の哲学とソノリティを今に甦らせてくれる。年齢的な制限はあるにしろ、そうした才能を持ち合わせた特異なピアニストの作品として、ニレジハージの演奏はとらえられるべきであろう。

今回のコンサートに、私は絶大な期待を抱いている。そしてきっと〝神聖な狂気〟は我々の期待を裏切ることがないだろうと確信している。

（NYタイムズ主席評論家）

アルヴィン・ニレジハージの経歴

アルヴィン・ニレジハージは、1903年1月19日に、ブタペスト（ハンガリー）に生まれた。父は同地国立オペラ合唱団のテノール歌手で、母は優れたアマチュアのピアニストであった。

この両親の音楽的資質を一身に受継いだ彼は、まだ1才にならない時、話す以前に父の歌うのを真似することが出来た。2才の時、彼はもちろんまだきちんと言葉を話すことは出来なかったのだが、耳にするメロディーを正しく歌うことが可能であった。3才になると、彼には完全な音感が備わっていることが確認された。

3才頃、作曲を初め、同時にピアノのレッスンも始める。

1909年、6才で初めてのリサイタルを開き、ハイドン、グリーク、ショパンの作品と、彼自身の作品、セロとピアノのための〝葬送行進曲ト短調〟を演奏した。同年、リストの弟子であったステファン・トーマンに師事する。彼はその後、アーノルド・ゼクリー、アーンスト・ドホナーニ、フレデリック・ラモンドに師事した。同時に理論をレオ・ワイナーとアルバート・シコスの指導を受けた。

1914年（11才）から本格的に演奏活動を始め、オーケストラとのデビューは、翌1915年10月12才の時だった。この時、彼はベートーベンの〝ピアノ協奏曲第3番ハ短調〟を、ベルリンフィルハーモニックとマックス・フィドラーの指揮のもとで演奏した。

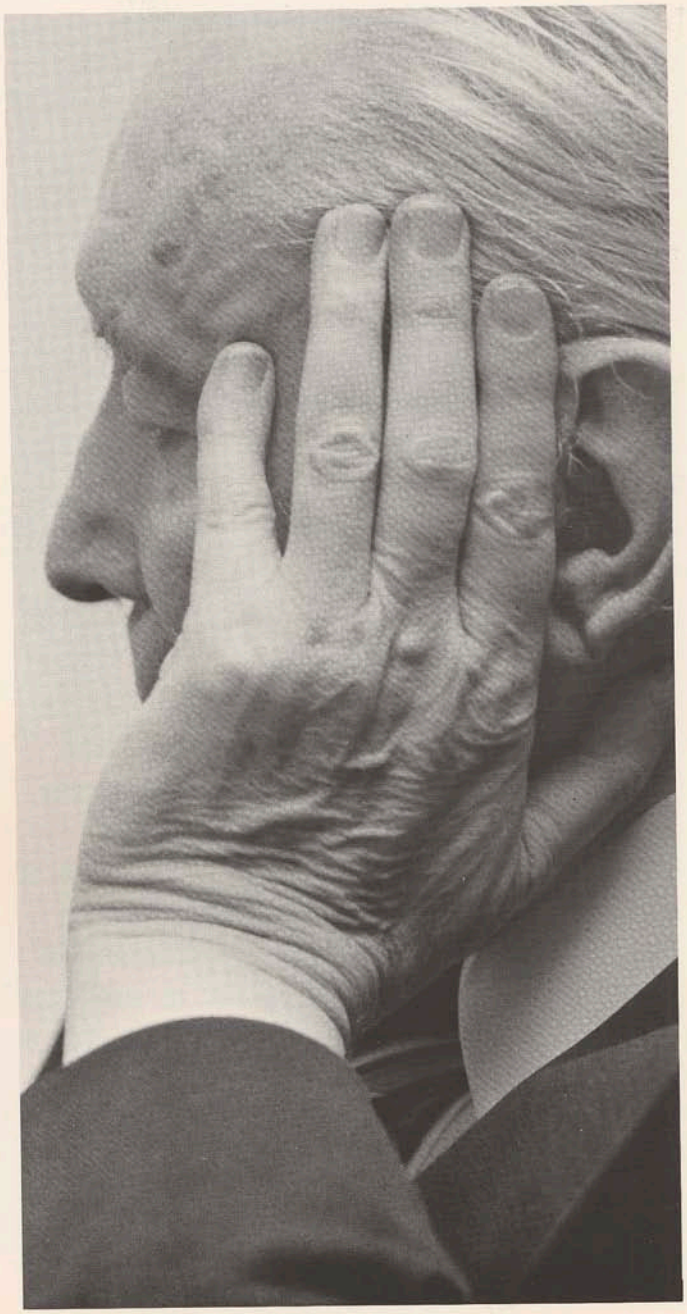
これより5ヶ月前、彼はその生涯に強い影響を与えた〝リスト〟に出合ったのである。その出合いは彼の音楽観・人生観を変えるほどの強烈なものだった。

1918年から1920年夏頃まで、彼はヨーロッパ各地から円熟したコンサート・アーティストとして迎えられ、活発な演奏活動を展開する。

1920年17才になった彼はアメリカに渡り、10月18日カーネギー・ホールに於けるアメリカでのデビュー・コンサートは、「彼は17才のパデレフスキーだ。今シーズンの大事件」と賞讃され、音楽界に大センセーションを巻き起こした。

彼の個性的で強烈な音楽表現を、一部の批評家は批難したが、大衆は喝采し、ほとんどの批評家もこぞって弁舌を尽くして讃美した。

この大成功によって彼はニューヨークに住むことを決意した。そし



て精力的に活動を続け、ピアニストとして確固たる地歩を築きあげていったのである。

1921年（18才）10月14日ボストン交響楽団と協演し、リストの〝イ長調協奏曲〟を聴いたオーリン・ダウンズは、「私はこれまで聴いたことがないような美しく歌う音、そして典雅で詩的な構想によった演奏を目のあたりにした。」と書き、「彼の演奏法に関する批難は不当だと考える。」と彼を弁護した。

アーノルド・シェーンベルクは1935年、オットー・クレンペラーへの手紙で次のように語っている。「ハネカーはニレジハージを〝新しいリスト〟と称しましたが、それは本当のようです……彼がピアノから取り出してみせる音（サウンド）には信じられないものがあります……信じられないような新しさ、力強さ、信念をとらえた演奏……私はこのような表現の力（パワー）を聴いたことがありません。」

1922年（19才）11月、彼の演奏に直接的な影響を与えた唯一のピアニスト、パデレフスキーの公演を初めて聴いた。

『モーツァルトの再来』とか、『リストの生まれかわり』など、ピアニストとして最高の讃辞を受け、またたく間に世界の楽壇の頂点にまで登りつめた彼の前途には、一点の翳りもないようにみられた。だが、彼のあまりにも純粋な精神は、自らの善美なる魂を汚されることに耐えられなかった。彼にとって、音楽は単に金や名声を得る手段とはとうてい考えられず、あくまで彼の裡から生じる深遠な魂の叫びの表現であった。彼のこの強い信念が、一切の妥協を許さず、混泥した社会との溝を必然的に深めてゆくこととなったのである。

——50年の月日が流れる——

この半世紀に亘る空白の謎に包まれた期間、ニレジハージの人生はどのような経路をたどってきたのか？。彼自身多くを語らないので詳細は分らない、しかし彼がもらす言葉の端々に、かたくななまで純粋に音楽と人生を愛し、魂を炎のように燃焼させながら、一片のパンすらうることができなかったほどの極貧の生活に耐え続けてきた半世紀

の〝生きざま〟を想像し感じることができる。その中に展開される数数の女性とのドラマティックな出合いは、時に悲惨で時に限りなく美しいものであった。

「私がピアニストなのはまったく偶然で、重要なのはピアニズムではなく、音楽なのだ。大多数の演奏家は、自分の技術を完全にするために生涯努力する。つまりかれらの音楽に対する情熱が人生となる。だが、私は人生への情熱が音楽となる。」と彼は云う。

ニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンゼルス等のスラム街をさ迷い続けながら、作曲、読書、リストの研究に没頭してきた彼の生活は今も続いており、その作品は、既に1,500曲を超えているという。

1973年（70才）復活のきっかけとなった演奏会は、9人目の夫人エルシーの入院治療費を得る必要が、彼を再びピアノに向かわせる契機を作ったのであった。50年の時空を超えてピアノと出会うことを得たこの天才の演奏を、偶然居合せたIPA（International Piano Archives）職員が録音し、この奇跡的演奏録音を所長のグレゴール・ベンコ氏に紹介した。ベンコ氏はテープから展開される信じがたい音の驚異にむせびないた。そして、彼をはじめ多くの人々の熱心な説得のすえ、フォード財団の協力のもとに、1974年9月ようやくレコーディングが実現したのである。

このレコーディングの他に、ソロ・コンサートあるいはオーケストラとの協演等企画されたが、すべて彼の意志によって実現されなかった。

1926年以来彼は殆んどピアノに触れていないにもかかわらず、リハーサルなしで打ち出される音の世界は強大で美しく神々しいものであった。地鳴りがするほどに強大なフォルテ、魂に滲み入るような深く美しいピアニッシモ『信じ難い』ような音の世界は人々を驚愕させた。

彼の復活の契機となった妻、エルシーは、レコーディングの1ヵ月後病没した。リスト以上にこの妻を愛していたニレジハージは、その後ピアノに触れていない。

4年後の1978年（75才）、傷心が癒ないまま彼は再度レコーディングにのぞむことになる。

「この時期ニレジハージは、ピアノを弾くことを憎んでいたかのようだった。そして必ずボトル1本の酒を飲み、酔いに気を紛らしてスタジオにやってきた。そんな状態で演奏することは客観的にも信じられないことだが…。」とリチャード・カップ氏は証言する。

またベンコ氏は「楽譜だけでなく、彼は人生のあらゆる瞬間を写真に撮ったように克明に覚えている。人間の救いとなっている辛さや悲しみを忘却することさえできないのだ。」と分析する。

ピアノを持たず、練習することもなかった50年の空白にもかかわらず、彼の演奏は人々を圧倒した。

本日（1982年1月10日）、記念コンサートに駆けつけ講演されるニューヨーク・タイムズ主席評論家ハロルド・ショーンバーグ氏は、「こんな力強い表現は知らない。」と語り、その芸術を高く評価した。

こうして悲しみと怨りをぶっつけ、驚嘆すべき〝神聖な狂気〟の世界を3枚のレコード盤に刻み、彼は三度いずこかへ姿を消したのである。

1978年3月2日付の毎日新聞は、ニューヨーク支局山本特派員報告の記事を載せた。〝幻のピアニスト復活〟〝ホロヴィッツもかすむ神技〟と、吹込みの模様を伝えた新聞記事が絆となり、新たな人々の心を動かし、1980年（77才）5月31日、6月1日の2日間、高崎音楽短期大学の招きで来日、50年ぶりの公開演奏が実現した。

同大学ホールに全国から集まった聴衆の前でのコンサートは人々に深い感動を与え、また彼自身も、演奏後のインタビューに、「今回の演奏における聴衆とのシンパシイ（共感）はとても素晴らしいものでした。演奏にも満足しています。」と答えた。

こうしてニレジハージと高崎音楽短期大学との結びつきは深まり、1980年12月、日本ニレジ協会が設立されるに至り、1981年現在彼の1,500曲を超える未発表作品の公表の気運へと高まり出したのである。ニレジハージは日本と日本人に対する共感と理解――私の求めている世界と日本は同じものです（彼のレコードのために寄せられた解説文より）――が生涯発表する意志を持つことのなかった孤高の天才の心を開かしめた。

1982年1月10日・日曜日、日本の心臓部群馬県高崎の地で彼の秘密の世界が2,000人の聴衆に伝えられる。それはあたかも長い間発見されなかった〝泉〟のようである。なぜなら泉は飲む人がいなくとも湧き出ずることを止めないからである。彼もそのように多くの作品を生み出してきた。作曲について語られた彼の言葉は本質的である。「私は作曲をしようとは特別に意図しませんが、私の心に美しい音、激しい音があふれ、耐えられない位です。私は書かずにはおられないのです。」と。

アルヴィン・ニレジハージ作品世界初演
Ervin Nyiregyhazi First historical parforwance in the world

●少年時代のニレジハージ●

●17才の天才児・ニレジハージ●

＊曲目・曲数は本日、ニレジハージ氏自身によって決定されます。
THE PROGRAM OF PIANO PERFORMANCE IS TO BE DECIDED BY MR NYIREGYHAZI HIMSELF.

「ある音楽における天才の心理学」より抜粋

ゲサ・レヴェッツ

この本は、1924年に、アムステルダムの心理学研究所長、G・RÉVÉSZ氏によって著され、1925年に、ニューヨークとロンドンで出版されている。

この本は、一人の天分豊かな芸術家の成長を、彼の幼少時代の芸術的知性的能力を分析することによって描こうと試みたものである。

（前書きより）

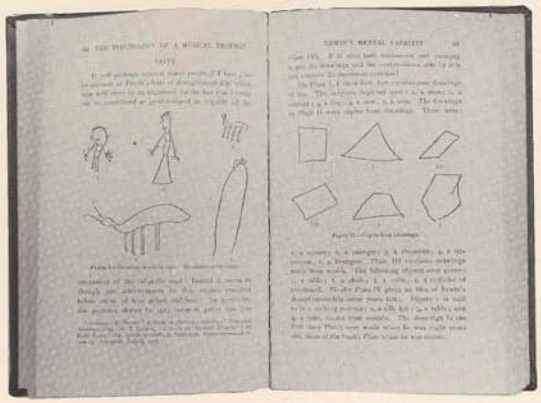
彼の性格は、モーツァルトの性格に非常に似ている。幼い時に目ざめた創造的才能、あらゆる面での早熟な発達、創造力の激しさと気楽さという二面性、芸術的進歩の速さ、楽器を巧みに演奏する非凡な才能、芸術に対する深い愛情、レベルの高い知性、機知、生きる喜び、優しさ、両親への献身、音楽教師への愛着、こうした彼の特徴は、子供の頃のモーツァルトと共通である。（序文より）

彼は自然がとても好きなので、私は彼が7才の春に、よく散歩に誘った。あるよく晴れた日に、私達が感動的な自然の美しさについて語り合っている時、彼はふと現代絵画に話題を移して、こう言った。「現代の画家は、美しい生き生きとした色を使うけど、こうした色は自然の色の美しさとは違っています。ぼくの親戚の家で見た絵の空の色は、緑でした。その色も絵もとてもきれいだったけれど、画家は自然に反するような色を塗るべきではないと思います。空を緑に塗る方がきれいだと思うならそうしてもよいけれど、完全に緑ではなく青味がかった緑にすればよいでしょう。」そこで私は尋ねた。「絵画の目的は、自然を忠実に再生することだと思うのかね。」「いいえ、画家が自然を正確に描くべきだとは思いません。だって、そんなことは不可能ですから。でも、少なくとも画家は、自然に反するような色を塗るべきではありません。その画家は、空を故意に美しく塗ろうとしたのです。」（著者㊟ 彼は、その画家が意図的に色を変えたことを非難しているが、これは、音楽作品は自発的に生まれてくるものであって、意図的に作り出すことはできないという彼の作曲についての意見と一致している。）

さらに彼はこうつけ加えた。「ぼくは、自然が一番好きです。日の光が木の間を通して輝やき、自然が生き生きとして見えるときは、素晴しい。ぼくが音楽で表そうとしているのは、生きている自然なのです。」日光や小鳥の歌などを作曲の中で表現したかどうか尋ねると彼は答えた。「いいえ、そういうものではなくて、例えば美しい森によって心に呼びさまされるような情緒を、ぼくは曲の中で表現します。生きる喜び、自然の生命、自然が与えてくれる喜び……こうしたものをテーマにします。悲しいことは作曲したくありません。ぼくは悲しみは嫌いだから。ぼくは、生きる喜びが好きなんです。」「生きる喜び」という言葉を口にした時、彼はまるで自然の美しさをすっぽりと抱きしめようとするかのように、両腕を差しのべた。彼はこの言葉を何度も表情豊かに使った。（〝ニレジハージの音楽的能力のテストによる診断〟の章より）

他の作曲家の作品を解釈する能力も十分備えていたが、彼の偉大な才能が十分に発揮されるのは、自分の作品を演奏する時だった。その時には、彼の鍵盤に触れる方法が違っていた。彼の動作は情熱を表し、作品の解釈に全神経を集中していた。彼の体力さえも、倍加しているように見えた。彼がどんなに力強い印象を聴衆に与えたかは言葉では言い表わし難く、実際にその場に居合わせた者でなければ、分からない。（〝ピアニストとしてのニレジハージ〟の章より）

（アムステルダム心理学研究所長）



プログラム Program

アルヴィン・ニレジハージ
ピアノ・リサイタル

—Ervin Nyiregyhazi Piano Risital—

ニレジハージ日本公演実現の経緯

小池　哲二

音楽都市といわれる高崎に音楽大学を創ろうと努力を続けていたある日、私はニレジハージと出会った。その昭和53年３月２日付新聞記事は私にとって運命的な予感に満ちていた。

文部省の大学設立認可を得る作業は、多忙と精神の集中を要求され、この時期には、大学の新設の抑制策が打ち出されていたから、大学を創立するということはそれ程簡単なことではなく、たび重なる厚い壁の前に、今にも打ち砕かれそうな状況に追いつめられていたのを思い出す。

私はそれまでの大阪での生活を捨て、堀越先生との出合を縁に第二の人生を歩き始めていた。

私は五里霧中の時、よく「明暗」のことを考えた。尺八音楽の根本はこの相対する概念で把えることができる。

私は繰り返しこの記事を読んだ。そして熱心に音楽仲間の昌宏庵に話した。

「大学の認可が取れたらこの人に会いに行こう！」と。

そして２年後、私達にニレジハージを探しに行く機会が訪れた。文部省の第一次審査をパスしたのが昭和54年12月27日。

すぐ米国への出発の準備を開始したが、彼の居所は皆目解らない。新聞社、レコード会社、米国、カナダの友人に尋ねてもニレジハージの名前すら知らない場合が多かった。

スラムを歩く時の身の安全と自己主張を考えて、私と昌宏庵は僧行で作務衣（さむえ）と天蓋（てんがい）に身をつつみ、私は尺八を２本、昌宏庵は短琴と琵琶をかかえてあてのない旅に出かけた。昭和55年３月のことである。

非常識で無謀な行動だと私達な多くの人に非難された。しかし私達は一抹の不安を残しながらも楽天的な気持を失うことはなかった。厳しい現実の中で、刃の上を歩くようなことをやってしまう動機は何だったろう。私達は刃の上で深手を負うかもしれない。しかし、それ以上に本物の芸術にふれたいという強烈な願望がどんどん私達を意識とは別の世界に導いていった。

私は今、彼との記録をまとめている。が、1982年１月10日のニレジハージの作品世界初演コンサート準備のために、そして彼のライブレコードをゼミの学生や協会員たちと一丸となって制作するために、相当の時間を費してきた。諸準備に追われ、この経緯文すら完成できず恥しい限りだが、素人集団の非力と私個人の力量のなさ故とお詫び申し上げたい。近い将来すべてを完成させたいと思う。ニレジハージと私達の出合いの時や彼の素晴らしい人格、心のふれ合いの中で感じることができた彼の芸術観、ロスアンゼルスのスラムの一角にある教会で彼が私のために弾いてくれたピアノの深淵な感動の世界、そして彼が私達に伝えてくれた真実の世界、個性に対する絶対的な確信、数え切れない彼との不思議な邂逅、女性への限りない愛、等々を明らかにしたいと思う。

ニレジハージと私達との象徴的な出合いや彼の来日が実現していったいきさつについては、おおまかな事実経過を新聞各紙が伝えているので、今回はその一部を転載させていただくことにより、ニレジハージ来日の経緯に替えさせていただきたい。

（高崎短期大学音楽科副学長）

幻のピアニスト　劇的復活　米国

貧民街を流浪50年

フォード財団援助　天才ぶりレコードに

レコーディング中のアーヴィン・ニレジハジ氏（CBSレコーズ提供）

▲毎日新聞　1978・3・2　ニレジハージ探索の切っかけを作った記事

November 30, 1981

Dear Mr. Koike:

Thank you very much for your two recent telegrams. I want you to know that your schedule to arrive in Los Angeles on December 22nd or 23rd and to leave with me for Japan on January 4, 1982, is entirely satisfactory to me. I also agree to give the two concerts mentioned by you. (January 16, 1982 in Takasaki City and January 21, 1982 in Tokyo) Finally, I want to express to you my deep appreciation of your endeavors in my behalf and my profound gratitude to the Japanese Government for the assistance given to you in furtherance of your endeavors.

Sincerely yours,

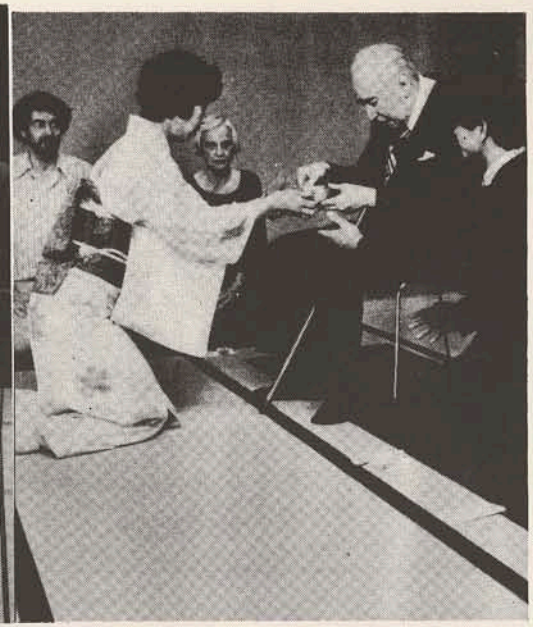
Ervin Nyiregyházi

▲ニレジハージよりの最近の手紙
1981・11・30付

▲最近のニレジハージ　1981・8・25
ロサンゼルスのパーシングスクエアにて

▼毎日グラフ　1980・7・6

(Ⅳ)はじめて抹茶を飲んだ氏は　それまでの緊張した顔をほころばせて「おいしい」を連発



(Ⅲ)日本に対する印象は「今迄日本について本を読んで抱いていたイメージと全く同じで　現代的なものの中にある伝統的な考え方に素晴らしいものがある」と語っていた（演奏のあと高崎短大の和室で茶の接待を受けるニレジハージ氏）

(Ⅱ)ロサンゼルスまで氏を探しに行った小池哲二さん（右）への信頼感は絶対的で　二人の間は実の親子のような絆で結ばれていた　今では両足も不自由　階段の登り降りすらハダシになる

(Ⅰ)大きな手　今ではかなり不自由なようす　「なぜピアノを弾かないのか」という質問に「昔から練習ということはしなかった　それはしてもしなくても同じだからだ　それよりも悪い気持ちの時に弾くと悪い音楽になってしまうことの方が嫌だ」と答えた

〝精神の自由〟に生きる孤高の哲人音楽家

五十二年三月二日付の毎日新聞が「幻のピアニスト復活」の見出しで特電を大きく報道したのを記憶されている読者も多いと思われる。

その「幻のピアニスト」アルヴィン・ニレジハージ氏が五月二十八日に来日、高崎市八千代町、学校法人聖徳学園が来春開設する高崎短期大学音楽科の本館落成を記念して、同月三十一日と六月一日に同校ホール（二百人収容）で、同の演奏をした。

ニレジハージ氏は、一九〇〇年、ハンガリーのブダペスト生まれで、今年七十七歳、四歳で作曲、六歳でリサイタルを始め、十一歳でカーネギーホールにデビュー。モーツァルトの再来。と、九二〇年代の音楽界にセンセーションを巻き起こした天才ピアニストである。しかし、十二、三歳の頃、金儲けに走るマネジャーと喧嘩。「心の自由が大事」と演奏活動をぷっつりと止め、貧民街に姿を消した。以来、五十年余りピアノから全く離れた極貧の流浪生活を送っていた。

ところが、一九七三年五月、九人目の夫人エルシーさんが大病。その入院費に困って、サンフランシスコの教会で実に半世紀ぶりにピアノに向かったのが復活の契機となった。この演奏がフォード財団を動かし、レコーディングされたが、氏はその印税を受けとらず、再び市井の人として姿を消してしまった。

◉二人の日本人演奏家の熱意

ニレジハージ氏の来日を実現させたのは、超越学術理事で尺八人師範の小池哲二さん（ことし登録演奏家の関川昌宏さん二段）。二人は、毎日新聞の記事を読み、レコードに興味を抱いた。ぜひ氏を日本に招こうと今年の二月、記事の載った毎日新聞を片手に何処に住んでいるのか分からない幻のピアニストを探す旅に出発した。二人は、ニレジハージ氏がスラム街に住んでいるらしいという情報から、身に危険がないようにと深編み笠の虚無僧スタイルで、まずロサンゼルスの貧民街から探し始めたが、全くあてなく、時間が徒労に過ぎていた。

そんなとき、以前小池さんと日本で出会い、それが縁で尺八を学び、佐渡の鬼太鼓座おんでこを）にいたことがあり、現在ハワイ大学で尺八を教えているライリー・リー氏がリサイタルを聞いた。協演に、ハワイを訪れたところ、リー氏の友人を通じ、偶然ニレジハージ氏が、ロサンゼルスのダウンタウンでホテル住まいをしていることを知った。早速、二人はそのホテルに投宿、氏を訪れて尺八と琴との演奏をしながらくどいた。同じミュージシャンとしての熱心な来日要請が氏の心を動かして、来日の運びとなった。

◉「音楽は金ではなく心だ」

はるばる日本を訪れたニレジハージ氏は、穏やかだが、プライドの高い老紳士。「音楽は、金ではなく心だ」といいきり、妥協し、お金を得て家を持つよりも、精神の自由を協調。孤高な哲人の風格を見せていた。

エルシー夫人は、千幸にも、九七三年に病没。今は十人目のドリス夫人と一緒だ。夫人は、ロサンゼルスの郵便局に勤め、夫人のかせぎで生活。氏自身は、毎日少しずつ作曲を続け、今年の三月までに書いた曲は二〇〇〇曲を超える。しかし、「十九世紀の様式で作曲しているので、今のプロの評論家は私の音楽を古いものとして理解してくれないだろう。だから絶対に生きている間は発表しない」と語る。

演奏方法も、「私のは十九世紀の終わりのもので、パワーが強すぎ、現代の原典尊重主義の世の中では、多分違和感を持たれ、嫌う人も多いだろう」とはっきり自己分析してみせる。この五十年間、演奏だけでなく、全く練習もしたことがないという。

今回の来日演奏に際しては、飛行機の中から好きな酒を一切断ち、精神の強度な凝縮に努めたニレジハージ氏は、ピアノに向かうと約二時間、インスピレーションに従ってベルディ、ワーグナー、リスト、シューベルトなど、次々と強大なクレッシェンドをたたき出し、心にしみるピアニッシモを弾いた。日常生活のヒ十七歳の老人の両手は、中風気味でコップを持つのがやっと。両足は介添えと杖なしでは歩行が困難という肉体条件を考えた時、それは信じられない、一種の神がかりの世界ともいえた。

◉賛否の中で…

この演奏を聴いたハワイ大学教授で、同大音楽学部長のリカルド・トリミロス博士は、客観的に考えても信じられないこと」と絶賛。同じハワイ大学のピアニストで音楽学者のバーバラ・スミス教授も「あの精神の凝縮された演奏には心うたれた」と感動していたが、日本の音楽評論家や専門家筋の評判は、氏のテクノロジーを表面的にとらえて批判的だった。しかし、一般聴衆は、氏のカタストロフィックな人生を象徴する演奏に引き込まれていた。

写真と文＝木之下　晃

100年の歴史が築く音楽百科の金字塔!!　（全20巻）

全巻刊行　新グローブ世界音楽大事典

The New GROVE Dictionary of Music & Musicians

Editor : Stanley Sadie　1980. 15.5×25.5cm., 15,000pages. With 3,000 illustrations.

好評発売中 全20巻 ¥420,000

M

来日した〝幻のピアニスト〟
アルヴィン・ニレジハージ

(Ⅰ) 〝モーツァルトの再来〟かと前途を嘱望されながら　二十二歳のとき突如ピアノの前から姿を消して五十年間　アメリカ各地のスラム街で人生を送っていた〝幻のピアニスト〟アルヴィン・ニレジハージ氏が　日本人邦楽家の熱心な招請で来日し　二回の演奏会で天才の片鱗を見せた

(Ⅱ) 1925年以降　50年間にわたって演奏活動を停止したが　その間　リストの研究と作曲に没頭しつづけて来た　尊敬する作曲家はチャイコフスキーだという（高崎短大で演奏中のニレジハージ氏）

(Ⅲ) 「ハンガリーの音楽家はお金よりも　人から尊敬される演奏をすることが絶対に必要だ」と語るニレジハージ氏の風貌は哲学者を思わせる

綜合建設業　信義と技術で奉仕する

井上工業㈱　取締役社長　井上房一郎

高崎本社　群馬県高崎市八島町5番地　☎0273-22-5841㈹

YAMAHA　ピアノ・エレクトーン

株式　晩平堂　前橋市本町一丁目3番4号

◀上毛新聞　1981・12・12(土)

アルビン・ニレジハージ氏 近づく歴史的コンサート

アルビン・ニレジハージ氏

ハロルド・ショーンバーグ氏

「モーツァルトかパデレフキーの再来か」といわれた天才ピアニスト、アルビン・ニレジハージ氏(62)は、来年一月十日、高崎・群馬音楽センターで、自演による世界初演コンサートを開く。同氏を招く高崎短期大学音楽科（堀越久良学長＝多野郡吉井町＝）はあと一カ月余に迫ったコンサートを成功させるため、準備に余念がない。ニレジハージ氏は「洋楽と邦楽を同等に取り上げ、音楽の新しい伝統を創造する」という同短大の教育方針に共鳴、半世紀ぶりの歴史的なコンサートを高崎市で開催することが実現したもので、同短大関係者はもちろんのこと、世界中の音楽関係者が注目と期待を寄せ、コンサートの日を待ち望んでいる。

文化

高崎短大音楽科

注目の記念講演も

一月十日　高崎・群馬音楽センター

生いたちの映画化決まる

コンサートは開校二周年記念行事のなかで行われるが、演奏曲は同氏の千五百曲余りとされる作曲のなかから千五曲ほど（二時間余り）の演奏が予定されている。

今回の歴史的なコンサートには、ニューヨークタイムズ紙の音楽評論家、ハロルド・ショーンバーグ氏をはじめ、作家・安岡章太郎氏、音楽評論家・高橋雅彦氏、作曲家・芥川也寸志氏、作家・井上ひさし氏、シナリオライター・山田太一氏、指揮者・山本直純氏、俳優・宮原文太氏ら数多くの著名な関係者がかけつける。

コンサートにあわせ、準備によって[illegible]おきたいという[illegible]の同氏のライブレコードの製作も[illegible]暫々と進められている。また、コンサートは大[illegible]コンサートの様子と同氏の生いたちを[illegible]なりをまとめたドキュメンタリー[illegible]映画を製作することも決まった。

レコードは前年同氏の同大を訪[illegible]むと開かれた記念演奏会での演奏[illegible]曲から抜粋したもので、チャイコフスキーの「エフゲニー・オネーギン」より、をはじめ、リストの巡[illegible]

▲インタヴューに答えるニレジハージ

Ninety-Five Years ago.
(In Memoriam July 31, 1886, Franz Liszt †)

Gerd Nigmayer
July 31, 1981

Lento Maestoso

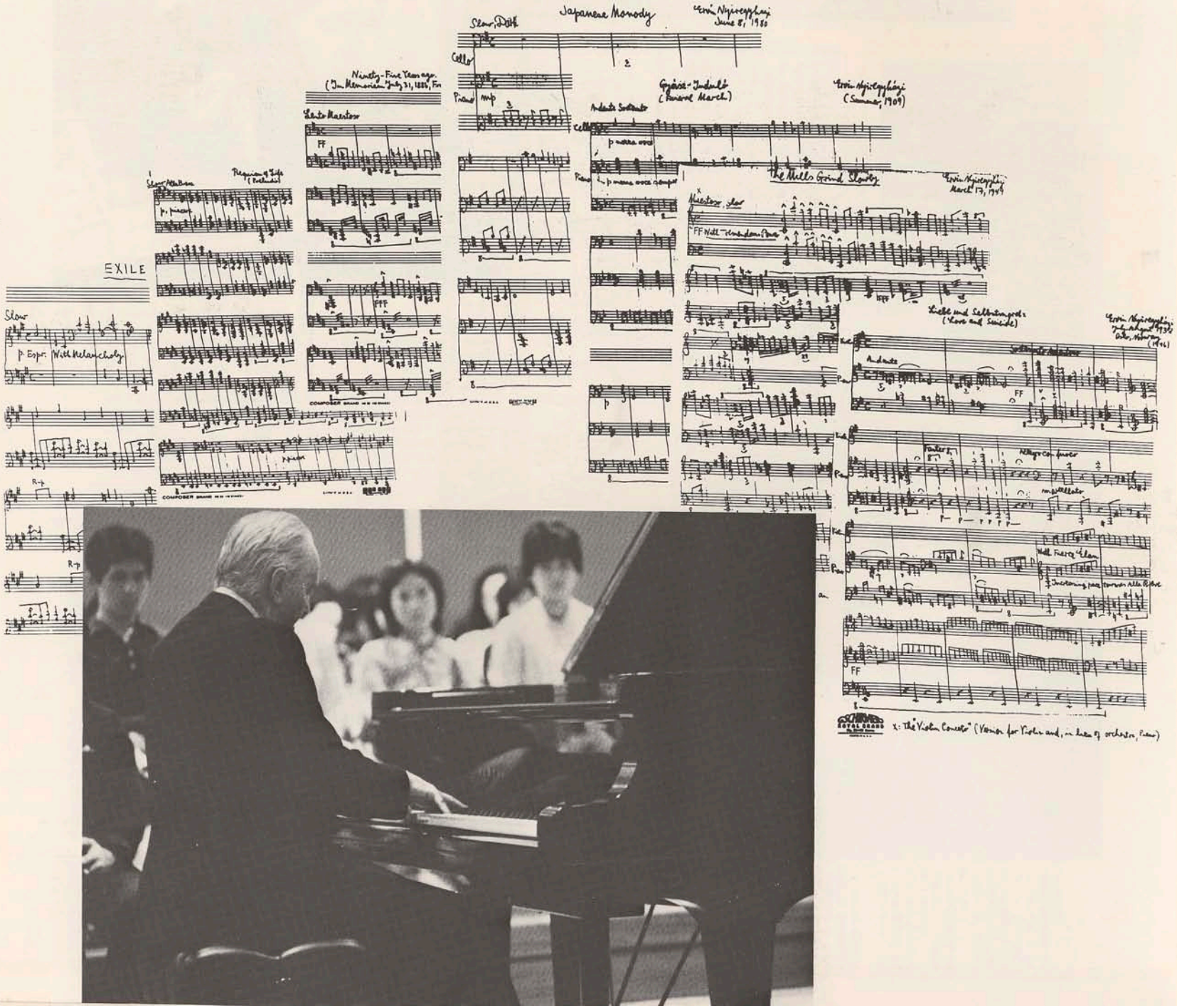
FF

Ff

FFF

COMPUSER BRAND MUSIC PAPER

LINEPRINTS


Japanese Monody
Ninety-Five Years ago
EXILE
The Mills Grind Slowly
Liebe und Selbstmord
(Love and Suicide)
x: "The Violin Concerto" (Version for Violin and, in lieu of orchestra, Piano)

幻の巨匠ニレジハージによるピアノ音楽の啓示！

THE MESSENGERS OF PEACE

平和の使徒たち ―第1集―

―PART 1―

ハネカーは、ニレジハージを〝新しいリスト〟と称しましたが、それは本当のようです。彼がピアノからつむぎ出す音には信じられないものがあり、少くとも私はかつてこれに似たようなものを知りません。
信じられないような新しさ、力と確信を持った演奏。
私はかつてこのような表現力を耳にしたことがありません。
―オットー・クレンペラーへの手紙―

アーノルド・シェーンベルク

神聖な狂気！
彼のように奏けたのはおそらく19世紀のアントン・ルービンシュタインだけだろう。

ハロルド・ショーンバーグ

1枚目

A面（1980年5月31日高崎音大での演奏より抜粋）

1．リスト　巡礼の年より「血のような涙」
2．リスト　巡礼の年第3年より「エステ荘の噴水」

B面（1980年6月1日高崎音大での演奏より抜粋）

1．チャイコフスキー　ロマンスop.51 No.5
2．ブランシェ　サルタンの庭園
3．シューベルト　野ばら
4．ドビッシー　パゴーデゥ（塔）
5．リスト　十字軍の行進

2枚目

A面（1980年5月31日高崎音大での演奏より抜粋）

1．チャイコフスキー「エフゲニ・オネーギン」より
2．グリーグ　叙情小曲集 第8集より「青春の日々より」

B面（1980年6月1日高崎音大での演奏より抜粋）

1．ワーグナー「リエンツィ」と「ローエングリン」より
2．リスト　羊飼いの音楽

LP（2枚）
解説（ハロルド・ショーンバーグ、藁科雅美、音大ゼミナール、他）
価格　¥5,500（限定盤）

申し込み方法

〒370 群馬県高崎市八千代町2-4-2
高崎音楽短期大学本部内　日本ニレジハージ協会
TEL 0273（23）7 4 1 3

〔銀行振込〕　群馬銀行・高崎西支店
（普通）124―228878

Program

アルヴィン・ニレジハージ作品世界初演
Ervin Nyiregyhazi First historical parforwance in the world

1.) After a German Poem by Heine 1932

2.) After a Hungarian Poem by Petöfi 1932

3.) Tired, Tired No. 2, After a Japanese Broadcast Oct. 1942

4.) Venezia, After a Hungarian Poem by Ady. 1941

Intermission

5.) After a Hungarian Poem by Ady 1933

6.) Checkmate No. 2, 1943

7.) Tragic Victory, 1943

●少年時代のニレジハージ●

Promoter **The Errin Nyiregyhazi Institute in Japan. Takasaki College of Music.**
Supporter **Ministry of Foreign Affairs. The Yomiuri Shinbun. Japan Foundation. NHK.**